

普及活動情勢報告（平成19年8月分）

安芸農業振興センター 農業改良普及課

情勢報告

資金借受農家への経営カウンセリング



昨年度の結果を数値で確認！
数字を読める農家も増えて来た。

8月13日、今年で4年目となる農業改良資金借受農家への個別経営カウンセリングを、まずは安田町からスタートした。今年の対象者は5市町村で24名。毎年提出をお願いしている決算書の数値と、JA出荷場の出荷データを基に、前作を振り返っての反省と、来作に向けた課題や取り組み内容の検討を行った。

これまでのカウンセリング活動により、新たに複式簿記記帳を始めた農家や、新しい品種を導入した農家もいることなど、年に1度、農業関係機関とともに経営内容を確認して行くことで成果も出始めている。

芸西村新規就農者と地域リーダーの交流会



地域リーダー(指導農業士、女性リーダー、青年農業士)と新規就農者が交流することで、お互い知り合い、地域の新しい担い手を地域で育成していくことを目的に交流会を初めて開催した。

地域リーダー(6名)からは人と知り合うことが大切、また農業士はいろいろな取り組みをしているので気軽に顔出しするようにアドバイスがあった。

新規就農者(7名)からは、「経験が浅く、質問することがわからない。」「親と営農しているが、数字のことがわからず不安。」「ハウスで実践的な内容の基礎講座を希望。」等の声がでた。

営農や生活の相談役として地域リーダーの活躍が期待される。

安芸市のアスパラガス圃場を農大学生が視察



熱心にアスパラガスを見つめる
学生たち。

7月27日(金) 安芸市の施設アスパラガス栽培農家(2件)のハウスへ、高知県立農業大学校から1年生6名が視察に訪れた。

安芸市のアスパラガス栽培は昨年からはまったばかりであり、生産者も学生との交流を楽しみにしていたようで、予定時間をオーバーして質問をし合う姿が、ハウスのあちらこちらで見られた。

視察終了後には生産者から、「自分たちもまだまだ勉強不足。これからも農大の学生さんや他地区の生産者と交流して、お互いに栽培技術を学んでいきたい」という声が聞かれた。

1時間半余りの短い時間であったが、将来の産地を担う若い学生たちとの交流は、産地に新たな風を吹き込んでくれたようである。

「土佐鷹栽培こよみ」と講習会



樹づくりの大切さを説明する。

H20 園芸年度、管内の土佐鷹生産者は穴内、安芸、中芸、唐浜の各集出荷場を中心に 83 人(10.7ha)になり、導入の進んでいなかった芸西、赤野の各集出荷場においても試験的に導入する農家が増えた。

そこで、「土佐鷹」の生産者が管内の先駆的な農家として皆で 18t どりを達成していく目的で「土佐鷹」の栽培講習会を各地区で実施した(参加者 43 名)。会では 9 月いっぱいの十分な灌水と摘葉を控えることが根張りを促進し高品質・多収につながることを実際の根や月毎の樹の大きさ(茎径)を指に置き換え、わかりやすく説明した(本年度作成の土佐鷹栽培こよみも使用)。参加者は樹作りが 18t どりに必要であることを理解してくれたようだった。

土着天敵勉強会でタバココナジラミの I P M 防除へ弾み！



土着天敵温存ハウスの視察

8 月 20 日に J A 土佐あき本所で、安芸農業振興センター管内の農家、営農指導員や管外の関係者を対象に土着天敵勉強会を開催し、農家 22 名、普及指導員・J A 営農指導員 30 名が参加した。内容は、タバココナジラミの有効な土着天敵であるカスミカメ類やカブリダニ類の生態や効果について農業技術センターの昆虫チームから講演があり、その後、土着天敵活用農家の有志で設置している「土着天敵温存ハウス」を視察した。参加農家の中からも「どこで捕まえられるか」や「いつどれくらい入れたらよいか」などの質問も多く出され、土着天敵の活用に向けて活発な意見交換が行われた。

東洋町のポンカン産地のあり方について意見交換を行う



話に熱心に耳を傾ける農家

8 月 9 日 J A 土佐あきカンキツ部甲浦支部総会が開かれた。

昨年、振興センターが中心になり「今後の東洋町のポンカン産地のありかた」について部会員対象にアンケート調査を行った。そしてこの間、このアンケートの結果をふまえ関係機関で産地振興の課題を整理してきた。そして次の 4 課題に集約した。

- ・地域としての販売戦略の構築
- ・下級品の加工による用途開発
- ・新品目導入も含めた技術指導のあり方
- ・農地を今後どのように守っていくか

総会において、振興センターからアンケート調査結果とこの 4 課題について説明を行った。また、J A からは下級品対策の取り組みについての報告があった。

その後、質疑応答になり、下級品対策や選果機の更新、耕作放棄対策など様々な意見が出された。

この意見をふまえ、センターからは関係機関と生産者の代表を含めて協議する場づくりの必要性を提案した。近々、部会役員と話を詰めるつもりである。